

あつい思いをこめて

瀧澤 和子

瀧澤助産院(福井県敦賀市)

石川県から素敵な助産婦さんが訪ねてくださいました。加藤和子先生です。初めてお会いしたのにすっかり意気投合し、あの出会いの日(平成5年12月20日)から私には信頼できるお友達(失礼)になってしまいました。この度、りれー随筆のご紹介を受け、とまどってしまいましたが、私にバトンを渡してくださった加藤先生にお応えするべく、そして、本誌を手にとられる勤務助産婦さん方に思いをめぐらし、地域での開業助産婦の活動やその思いを書かせていただくことにしました。

母の後を継ぎ、50歳で開業助産婦に

私の開業助産婦としての第一歩は、昭和50年の4月、50歳の時でした。助産院を開業していた母に「後を継いで」と言われつつづけていましたが、31年間の、小学校、高校の養護教諭としての勤務の後ですから遅い出発です。

母の助産婦の仕事は、昼夜の区別なく、家族の団らんの時もままならない多忙な日々でした。とりわけ昭和30～40年代は特に多忙で、出産が重なった夜間には呼び出され、私も出産介助をしていました。それに4人姉妹の一番上の私は母親代わり。母は赤ちゃんの母親であり私の母でないような淋しい思いもあったのです。こんなことが私の心の中で、母の後を継いで助産婦になる気持ちになかなかなくしていたのです。

しかし、定年を5～6年後に控え、今後の自分の生き方を考えて、長年の親不孝の思いもあり、50歳で退職、遅ればせながら開業助産婦としての新しい道を歩きはじめたのです。

私は幸か不幸か病院分娩に携わったことがなか

ったので、分娩は母が提唱してきた「お産は自然が大切」「待っていれば産まれる」を自然に取り入れて仕事をはじめていました。廻り道をしたようですが、確実に母の遺産を受け継いでいたのです。

結婚は夫婦の出発、出産は家族の出発

開業当時は、マスコミなどでお産革命やラマーズ法などが取り上げられており、世の中は病院分娩の見直しが始まった頃でした。私自身のお産の経験(昭和30年初めの精神予防性無痛分娩)から、じっと陣痛に耐えるより、腹式呼吸を行なうほうが陣痛の痛みの感じ方に差があることを知っており、ラマーズ法を妊婦さんに健康診査時に個別的に指導しておりました。

昭和59年6月より、念願の出産準備教室を月2回開設(4回で1クール)。テキストも手書きで今でも改訂しながら使っています。以来妊婦さんのお産に対する意識が大きく変化してきたのです。例えば、不安や恐れがとれ、お産を楽しみとして待ったり、入院の時期も自分の判断で決められる、赤ちゃんを家族とともに迎え、感動を共有する……など、積極的になってきたのです。

結婚は夫婦の出発点ですが、出産は家族の出発点です。女性にとって一生に数少ない生命^{いのち}がけの、かけがえのない瞬間^{とき}を、自分たちはどうしたいのかという認識がとてはっきりしてきたのです。その結果、夫婦で協力して乗り越えようという意欲につながっています。分娩室や分娩台のない(母親たちの希望により改築の時にもつくりませんでした)褥室のタタミの上で、家族ぐるみの素敵なお産がどんどん増え、以来90%を越えています。



赤ちゃんは産みたい時に産まれてくる

このようなお産を介助しているうちに、「赤ちゃんは産みたい時、産みたいように産まれてくる」という思いが、私の心の中に広がり、半ば確信に変わってきました。しかし、それを証明する文献も見当たらないまま、どこかにあるのではと思っておりましてところ、平成5年4月に放映されたNHKスペシャルの中で、コーネル大学のピーター・ナサニエル博士の羊の実験による「子宮の収縮の最初のきっかけは胎児の脳から分泌されるホルモンである」という最新の学説に出会ったのです。私の思いが間違っていなかったと胸の熱くなるような興奮を覚えました。

予定日が父親の出張や上の子の園の行事などと重なることがあります。赤ちゃんも家族の一員として感じ取っているのでしょうか、不思議なことに約80%のお産で、お母さんの思いを受け入れて赤ちゃん自身がサインを出し、お産をスタートさせて産まれてきているようです。

母親たちといっしょにフォーラムを

ここの助産院で出産した母親たちの会があります。「おへその会」と言いますが、今年は、おへその会10周年。母親たちの手で写真展と同窓会と記念フォーラムが、この6月末に開かれました。昨年の1月から準備。おっぱいを飲ませながら、子供同士の遊びやケンカを横目に見、月に何回も集まり、と母親パワーは大変なものでした。テーマは「We say 生」。出産を通して家族皆が前向きに生きようとする思いで母親たちが考え出したので

す。記念フォーラムは、「赤ちゃんだって主張する。こんな風に生まれたい」。写真展の写真選びもすべて母親たち。同窓会では「おへその会」10周年の冊子が作られ、多くの子供たちに囲まれ、私に嬉し涙を流させてくれました。また母親たちの作詞作曲「おぼえていますか」のメロディーを聴いた時の感動は今も忘れることができません。助産婦冥利につきるとはこのことでしょうか……。

「尊厳生」を大切にしたい

「主体的に産む」ということが広がってきています。重要なことですが、でも私はそれが最終目的ではなく、赤ちゃんの「こんな風に産まれたい」をキャッチし、赤ちゃんの人格が尊ばれることが第一義的に考えられてこそ、主体的出産だと思っています。赤ちゃんの産まれ出る力、母の産む力を信じることで、お産は日常なことととらえ、産む側と受け入れ援助する側の選択肢として、このような自然なお産が広がればいいと思います。

北陸の小さな町の小さな助産院、でも熱い思いは大きく、今後の日本の母子、助産婦の将来を危惧したり、地域の母親たちが、お産やおっぱいのこと、子育てのことで助産婦との関わりを強く求めている現実を伝えたいという思いは膨らみます。母親たちの持っているエネルギーは大変なものです。母親と助産婦が協力して大きな声とし、うねりとしなければ道は広がらないのではと思うのです(色々とお声をお聞かせください)。

次は、地域でお産をじっと見守る姿勢を取りつけ、後輩の指導に当たっておられる毛利種子先生にバトンタッチいたします。